篠窯の実年代

石井清司

1．柳澤和明さんからの手紙

平成７年、共同研究「古代における生産と流通－篠の製品の分布－」[注1]に関連して宮城県多賀城跡研究所を訪れ、篠製品と思われる緑釉陶器・須恵器を実見した。この時に同研究所を案内、遺物の実見に便宜をはかっていただいたのが柳澤和明さんである。

多賀城跡では、平安京との関連から緑釉陶器とともに篠産の鉢が持ち込まれており、平安京の土器編年と多賀城跡の土器編年を考える上での有効な資料として篠産の鉢が検討されている。その際、多賀城跡ＳＫ2175で、篠西長尾５号窯の製品と思われる鉢Ｃ[注2]が出土しており、同遺構及び同様の鉢Ｃが出土したＳＥ2132が10世紀前半に降灰した火山灰層の直上遺構であることから、多賀城跡の土器編年の10世紀中頃(950年前後)にあてはまり、私が考えている西長尾５号窯の年代とずれがあることを知った。

その後、柳澤さんから篠産の鉢Ｃの平安京における資料と手紙をいただき、西長尾３号窯が平安京Ⅱ期中(870～900年頃)、西長尾５・６号窯が平安京Ⅲ期中・新(960～1010年頃)の時期ではないかという指摘をいただいた。柳澤さんの手紙は平安京の資料を検討し、平安時代の土器を熟知した内容のものであり、私の勉強不足では反論できるものではなく、安易な形で即答する内容のものでもないため、もう一度平安京の土器を検討した上で柳澤さんに返事を書こうと思っていた。その間にも数年が経過し、手紙を出せずにいたが、今回はこの論集を機会に柳澤さんに返事を書こうとしたものである。

2．あのころの発掘調査

篠窯跡群の調査は、昭和51年度の前山１号窯の調査から始まり、昭和61年度までの10か年をかけて試掘・発掘調査が行われた。そのうち、筆者が調査担当した窯跡は昭和56年度の西長尾窯跡群、昭和57年度の石原畑窯跡群の２ヶ所であり、筆者が窯跡群の調査に参加する以前の黒岩１号窯、前山２・３号窯、小柳４号窯については調査概要に頼らざるを得ない。このため、ここではその当時の発掘調査の状況、遺物の出土状態を『発掘調査概報』をもとに簡単に列記する。

黒岩１号窯の調査　黒岩１号窯(注3)は昭和52年度の黒岩Ｃ地区の試掘調査で検出した窯で、篠窯跡群での緑釉陶器焼成窯の存在が明らかになった記念すべき窯である。遺物は窯体内のほか、両焚き口部から1.8ｍの範囲に広がる灰原内から出土しており、緑釉陶器のほか、施釉以前の素地や日常雑器である椀・鉢などが出土している。また、黒岩１号窯から南東方向に約30ｍの黒岩ＣＭ14地点で窯に関連した作業場跡と推定される石列遺構を検出しており、その地点でも黒岩１号窯の製品と思われる緑釉陶器・須恵器が出土している。

小柳４号窯の調査　昭和54年(1979)に発掘調査(注4)が実施され、当初は１基の半地下式構造の窖窯(１号窯)を想定して発掘調査が実施されたが、１号窯の南側で２・３号窯(後日訂正)を検出し、昭和55年度(注5)には２号窯に付随した柱穴などの遺構を検出している際に窯壁の一部を検出したため、昨年度調査区の南側にトレンチを拡張し、４号窯の存在が明らかとなった。

『発掘調査概報1980』では、小柳窯跡群出土遺物として窯ごとの遺物の提示はおこなわれなかったが『発掘調査概報1981』では窯ごとに遺物を提示し、１号窯は「灰原下層」のもの、４号窯は「４号窯南北灰原」として資料提示された。ただ、この報告書では１号窯出土遺物のなかに鉢(第72図－29)のように４号窯に帰属する可能性のあるものも図示されている。

当時の土器の編年観を反映したものとして水谷壽克は４号窯を「平底椀(第74図－１～３)の出土から黒岩１号窯の後に想定される11世紀(注6)」を考えた。

前山２・３号窯の調査　昭和52年度(昭和53年３月)半地下式構造の窖窯(前山１号窯)の発掘調査(注7)を実施し、その灰原については「土砂取り等のため攪乱が著しく、最下部に於いても現代のものが検出されるので、遺物等については層序的な取り扱いが出来なかった(注8)」。

２号窯は１号窯の南約15ｍから灰原と窯体本体と思われる焼土層を確認したため、昭和55年度に発掘調査(注9)を実施したもので、２号窯の北側で新たに３号窯を検出した。

２・３号窯の先後関係は「２号窯右焚口部が壊された個所に堆積した濃黒色灰層は３号窯から及んだ(注10)」と考えられており、この灰原の堆積状況から２号窯が３号窯に先行するものと安藤信策は考えている。１号窯と２号窯の距離は約14ｍで、灰原の範囲からは１号窯の遺物が２・３号窯の遺物と混在する可能性が少ない。ただ、『発掘調査概報1981』の前山２・３号窯出土遺物(第83～85図)を見る限り、後述する消費地での土器編年からみると９世紀中頃の遺物と10世紀のものが混在している。この９世紀中頃の時期のものと10世紀のものの混在を、遺構の先後関係から２号窯が９世紀後半、３号窯を10世紀前半と考えることも可能であるが、２・３号窯から出土した緑釉陶器から考えると、２・３号窯の操業時期は近接した時期であり、９世紀段階の土器は何らかのかたちで、２・３号窯の灰原に混

在したものと考えられる。

西長尾窯跡群の調査　昭和53年度、西長尾F地区の試掘調査[注11]を行い、1・3号窯の窯体と1・3号窯の間で灰原を検出したため2号窯を想定したが、1号窯の南西部に池があり、近世以降にため池を作る際に大きく削り取られていた可能性があること、調査したBトレンチが現水田であり、水田耕作に際して2号窯の大半が削り取られていたと試掘調査では推定した。

昭和57年度、西長尾窯跡群の発掘調査[注12]を実施し、2号窯は窯全体が大きく削平されており、わずかに円形焼土と拳大の粘土塊を検出したのみであったが、新たに2基の窯(5・6号窯)を検出し、6号窯の上位に新たに5号窯が構築されていることが明らかとなった。6号窯の窯体内からの遺物が極少であり、6号窯の灰原も新たに作られた5号窯の灰原と混ざった状態であったため、明確に6号窯の遺物を抽出することはできなかった。西長尾5号窯北灰原の中と昭和53年度の試掘調査のAトレンチの西半分で出土した遺物(2トレンチ・西長尾F地区)に6号窯に帰属するものがある可能性がある。

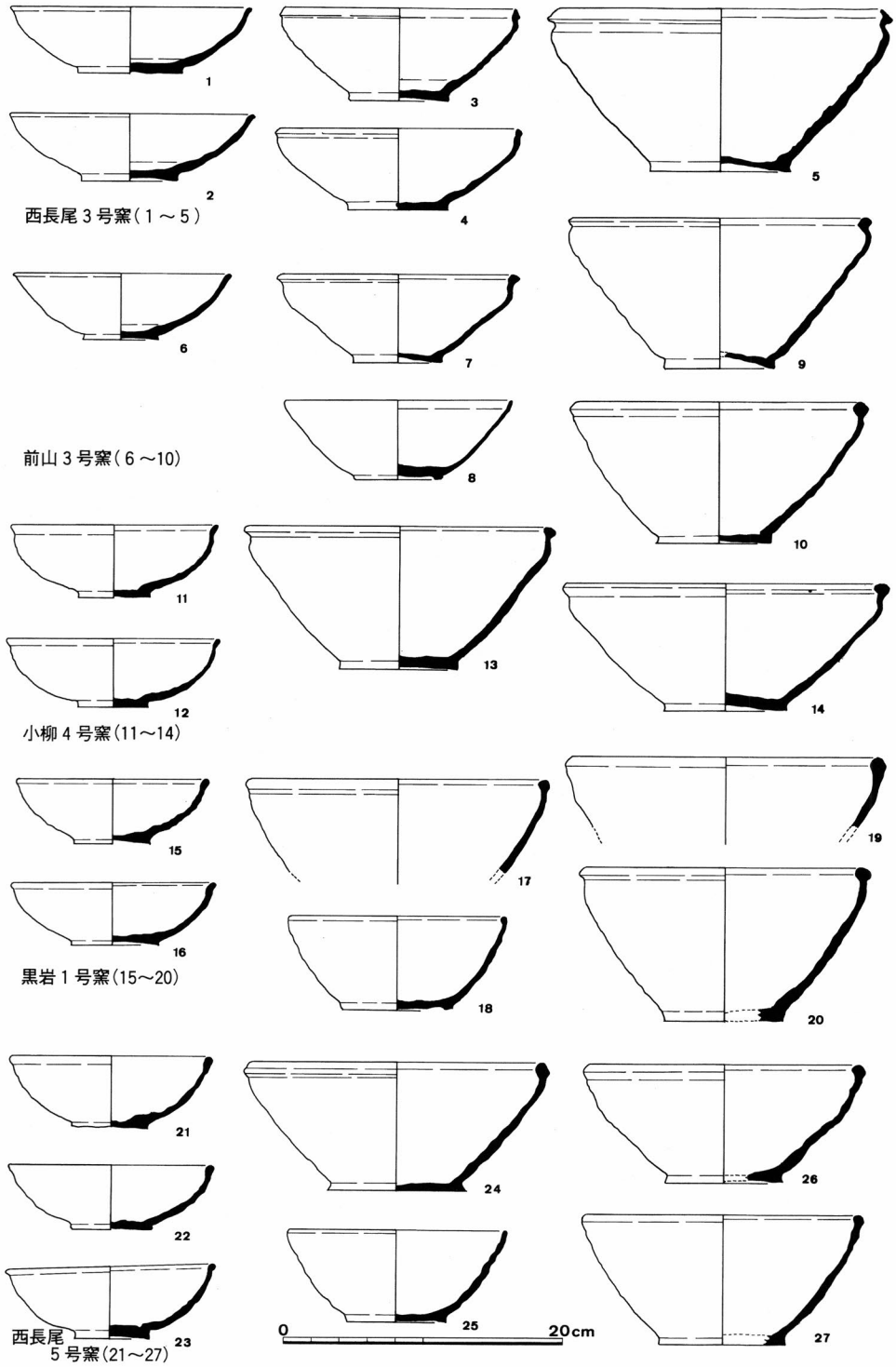
西長尾3号窯は5・6号窯の灰原と重複することがない。灰原は上層と下層に大別できたが、遺物を見る限り3号窯の灰原上層と下層では大きな差異はないものと思われる。

3．各窯出土の土器の特徴

西長尾3・5・6号窯、前山2・3号窯、黒岩1号窯、小柳4号窯は篠窯跡群のなかでも後半の時期に操業した窯である。前山2・3号窯、黒岩1号窯は明らかに緑釉陶器も焼成したほか、西長尾5・6号窯も緑釉陶器を焼成した可能性があり、緑釉陶器の器形である椀C・D、皿Eなどが出土しているが、他に日常雑器である杯Ab、椀B、鉢B・Cなども焼成している。

前山2・3号窯、黒岩1号窯出土の緑釉陶器、あるいはその素地を比較して、安藤信策は黒岩1号窯と前山2・3号窯の緑釉陶器の「形態手法は似ているが、前山の緑釉の方が作りが丁寧でシャープに仕上っており、椀の稜がより明確なものがあること等先行的な要素がみとめられ[注13]」、前山2・3号窯が黒岩1号窯に先行することが明らかであるが、小柳4号窯のように緑釉陶器の器形が出土しておらず、ほかの器形のみが出土しているものや焼成の主体が日常雑器である西長尾5・6号窯との先後関係を比較することが困難である。そのため、ここでは4窯跡支群で共通して出土している椀B、鉢B・Cなどの日常雑器の形態とその法量変化から各窯の先後関係を検討していきたい。

西長尾3号窯の鉢Bは他の窯の製品のものと異なっている。鉢Bの口縁部の形態は体部上端で肩部を形成、頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部は内方にむかって尖り気味に



第１図　窯別椀Ｂ・Ｃ実測図

おわる。鉢Bの法量は、第1表のとおり、口径平均23.01cm・器高平均12.30cm・径高指数(器高÷口径)0.57・外傾指数[注14]2.08を測る。

椀Bは平底の底部から内湾ぎみに立ち上がるもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部はいずれも糸切りで切り離している。口径14.5～20.0cm・器高3.0～6.1cmとばらつきがあり、口径平均16.10cm・器高平均4.86cm・径高指数0.30・外傾指数1.11である。

前山2・3号窯の椀Bはその出土量が少なく、一概には言えないが、西長尾3号窯と同様の形態で、計測できる6個体は口径平均15.23cm・器高平均5.11cm・径高指数0.34・外傾指数1.04である。

鉢は、体部上端で肩部を形成したのち、口縁部がわずかに内傾し、口縁端部は内・外方に肥厚させて玉縁状を呈したもの(鉢C)で、口径16.5cm前後に集中するものと20.0cm前後に集中するものがあり、口径平均19.97cm・器高平均10.03cm・径高指数0.49・外傾指数1.34である。なお、前山2・3号窯では水谷壽克が論述[注15]するように椀Bとともに鉢Cも3号窯の灰原に集中して出土していることから、椀B・鉢Cは2号窯に後出する3号窯で生産された可能性が高い。

小柳4号窯では他の窯に比べて出土遺物が少なく、わずかに椀B・鉢Cが出土したのみである。

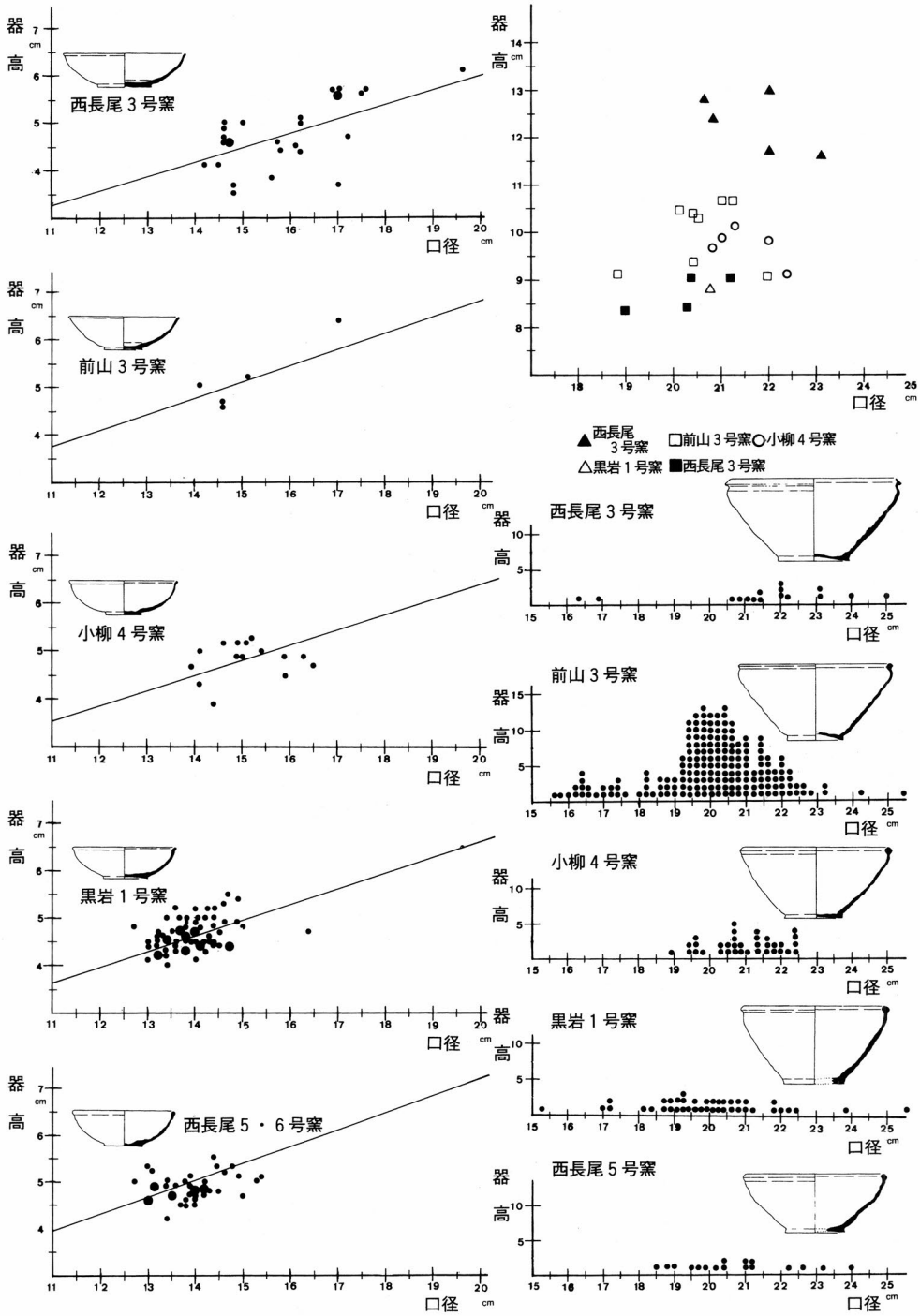
椀Bは平底の底部から体部下半に丸味をもって立ち上がり、口縁端部は外反しながら尖りぎみにおわる。椀Bは比較的法量の集中がみられ、口径平均14.54cm・器高平均4.78cm・底径平均6.02cm・径高指数0.31・外傾指数1.05で、西長尾3号窯・前山3号窯出土椀Bに

第1表　椀Bの法量変化

窯　名	計測個体数	口径平均	器高平均	底径平均	径高指数	底径指数	外傾指数
西長尾3号窯	26	16.10	4.86	7.27	0.30	0.45	1.11
前山3号窯	6	15.23	5.11	5.87	0.34	0.38	1.04
小柳4号窯	20	14.54	4.78	6.02	0.33	0.45	1.21
黒岩1号窯	85	13.86	4.59	6.24	0.33	0.45	1.21
西長尾5号窯	32	13.96	4.98	5.67	0.37	0.04	1.24

第2表　鉢B・Cの法量変化

窯　名	計測個体数	口径平均	器高平均	底径平均	径高指数	底径指数	外傾指数
西長尾3号窯	16	23.01	12.30	9.80	0.57	0.45	2.08
前山3号窯	21	19.97	10.03	7.83	0.49	0.37	1.34
小柳4号窯	19	20.55	9.76	7.48	0.46	0.35	1.42
黒岩1号窯	15	20.60	9.75	10.40	0.47	0.50	1.65
西長尾5号窯	18	20.71	8.78	9.40	0.44	0.47	1.63



第２図　篠窯出土椀Ｂ・鉢Ｂ・Ｃ法量分布図

比べて、口径・器高が小さくなる傾向が看取できる。

鉢Cは前山3号窯と同様、体部上端で肩部を形成するが、肩部上端では前山3号窯に比べて直立ぎみとなる。口縁端部は内・外方に肥厚させて玉縁状を呈している。口径平均20.55cm・器高平均9.76cm・径高指数0.46・外傾指数1.42である。

黒岩1号窯出土の椀Bは小柳4号窯に比べて体部下半の丸味が少なく、底部から腰部を形成することなく口縁部に続き、口縁端部はわずかに外反するが、小柳4号窯にくらべて明瞭さはなく、端部を外側に肥厚させて丸味をもつ。黒岩1号窯出土椀Bは口径平均13.86cm・器高平均4.59cm・径高指数0.33・外傾指数1.21で、小柳4号窯に比べて口径・器高がさらに小さくなる。

鉢Cは前山3号窯、小柳4号窯出土の鉢Cのように、体部上端で明瞭な肩部を形成することなく口縁部へ続き、口縁端部は玉縁状を呈するがその厚みは前2者に比べて薄くなる。口縁端部の形状が若干異なるため口径比較はできないが、前山3号窯の口径平均19.97cmに対して、黒岩1号窯出土鉢の口径平均は20.60cmで、器高平均9.75cm・径高指数0.47・外傾指数1.65である。

西長尾5・6号窯では、5号窯の製品と6号窯の製品を峻別することができないため、ここでは一括に扱う。椀Bは黒岩1号窯出土の椀と同様、底部から斜め上方に内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外方にわずかに肥厚し、丸味をもっておわる。口径平均13.96cm・器高平均4.98cm、径高指数0.37・外傾指数1.24で、黒岩1号窯に比べて器高がやや高くなる。

鉢Cは黒岩1号窯のものと同様、肩部を形成することなく、口縁部へ続き、24のように口縁部はわずかに内傾したのち、玉縁状に肥厚するものと、27のように体部と口縁部の境がなく、口縁端部も玉縁状を呈しないものが混在している。両者はいずれも灰原内で、その層序に相違がなく、いずれかが6号窯に帰属し、いずれかは5号窯に帰属するのかは出土位置・層序では明確にできなかった。鉢Cは口径平均20.71cm・器高平均8.78cm・径高指数0.44・外傾指数1.63である。

4窯跡支群出土の日用雑器は形態・法量にわずかながらも変化がみられる。すなわち、椀Bでは西長尾3号窯、前山3号窯では口径・器高にばらつきがあり、小柳4号窯、黒岩1号窯、西長尾5・6窯では法量がある程度集中する。椀Bの口径は西長尾3号窯から順次小さくなる傾向にあり、器高も西長尾3号窯ではやや低く、前山3号窯でやや高くなり、小柳4号窯・黒岩1号窯と低くなり、西長尾5号窯でわずかに高くなる。それに連動して外傾指数も変化する。

鉢B・Cは口縁端部の形状変化にもよるが、口径は西長尾3号窯が大きく、前山3号窯で最も小さく、小柳4号窯・黒岩1号窯・西長尾5号窯へと徐々に大きくなり、外傾指数

も同様の変化を示す。器高は西長尾３号窯以降徐々に小さくなる。

このように、４基の窯から出土した遺物は椀Ｂの法量変化、鉢Ｂ・鉢Ｃの形態・法量変化を示す。ただ、西長尾３号窯と前山３号窯の窯のように、前者の半地下式構造の窯と平窯、日用雑器を主体に生産した窯と緑釉陶器を含めた特殊な遺物を生産した窯の相違があり、両者が土器の型式・時間差を表さず、同時併存していた可能性もあるが、前述の形態及び法量変化から西長尾３号窯と前山３号窯では時期差があるものと考えている。(注16) このことから、篠窯での後半期では大きくは西長尾３号窯→前山２・３号窯→小柳４号窯→黒岩１号窯→西長尾５・６号窯へと時期を追って変化(注17)していくものと思われる。

４．消費地からみた篠窯の年代

西長尾窯跡群の報告書『篠窯跡群Ⅰ』の原稿の大半は1984年３月に提出していたが、諸般の事情により刊行は1985年12月となった。この報告書で西長尾３号窯を10世紀第１四半期、前山２・３号窯を10世紀中葉～10世紀第３四半期、黒岩１号窯を10世紀第３・４四半期、西長尾５号窯を11世紀第１四半期と考えた。

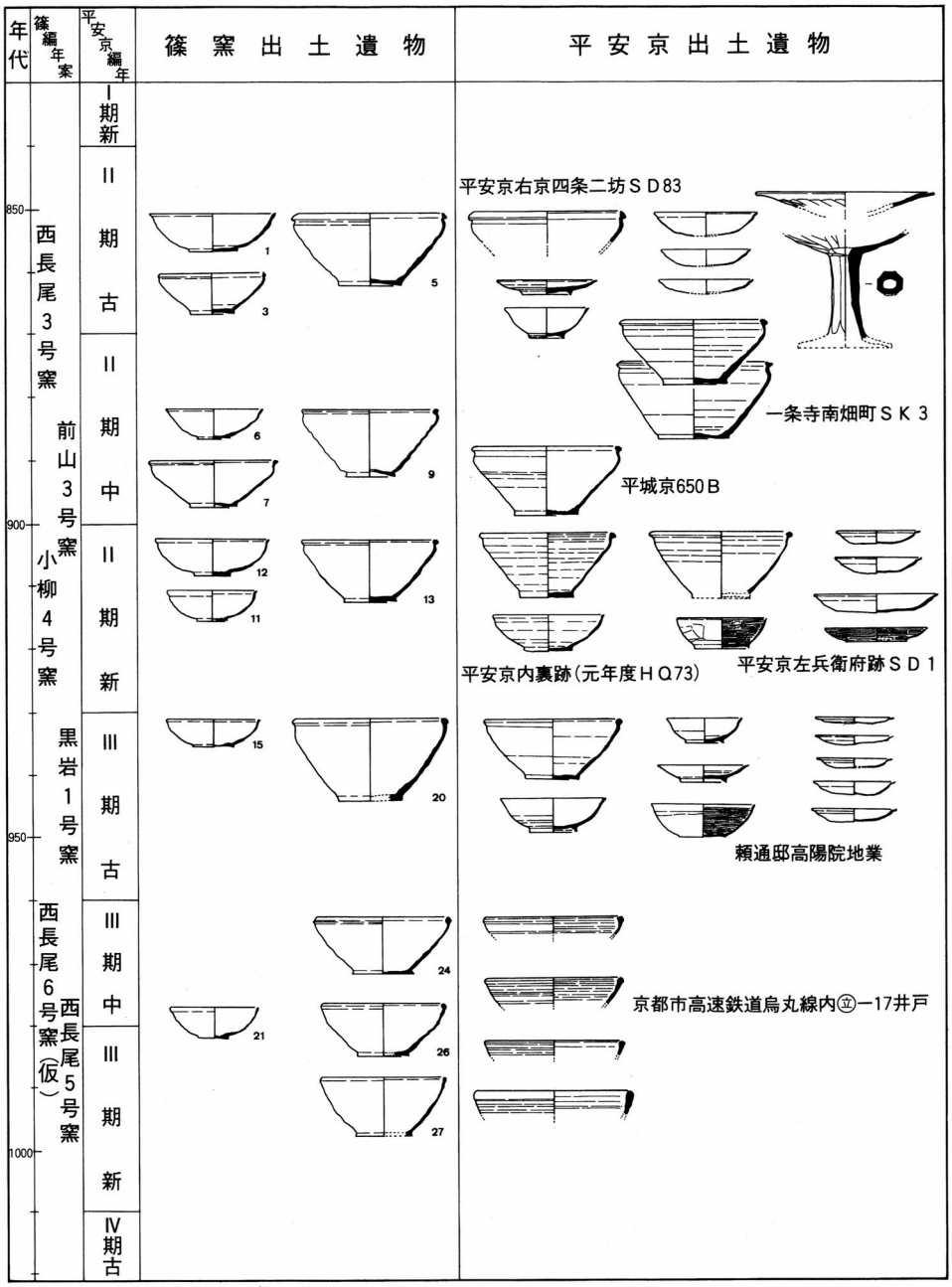
ただ、原稿作成当時の平安京を中心とした消費地での篠窯で生産された後半期の須恵器の出土量は少なく、平安京右京二条二坊ＳＸ１、平城宮ＳＤ650Ｂ、平城京薬師寺西僧坊などの限られた資料から篠窯の操業年代を推定したが、報告書刊行以降、平安京を中心として消費地での土師器を中心とした総合的な土器編年が進むとともに暦年代がわかる資料が増加した。ここでは最近の消費地での土器編年に照らし合わせて篠窯の年代を検討していきたい。

平安京の土器類は「土師器の小型食器類の製作技法や形態変化などをもとに」Ⅰ～Ⅳ期に区分され、「各期は、法量や器種の組合せ、細部の形態変化によって」さらに古、中、新の３型式に分かれている。各期、各型式には紀年銘資料を伴うなど暦年代を推定できる資料があり、20～30年単位で細分(注18)されている。

ここではこの細分化された各期、各型式に準拠して関連資料をみていく。

西長尾３号窯出土鉢Ｂに近似した資料(注19)には、平安京右京二条四坊溝１(注20)、同右京六条一坊ＳＥ155(注21)、同右京八条二坊第８層(注22)、同右京四条二坊ＳＤ83(注23)、右京北辺二坊七町ＳＥ６(注24)、平安宮職御曹司(注25)跡、西寺(注26)跡、一乗寺向畑町遺跡ＳＫ322(注27)などがある。各遺構は紀年銘を伴う資料はないが、平安京右京六条一坊ＳＥ155は平尾氏によると平安京Ⅱ期中、平安京右京二条四坊溝１は山本氏によると冷泉小路の北側溝に推定されており、溝１の土器群を９世紀の終わり～10世紀初頭に位置づけている。

前山３号窯では緑釉陶器の出土例が平安京以外でも多く知られているが、緑釉陶器では



第３図　篠窯出土遺物編年案

前山３号窯の製品のみを単体で出土する例が少なく、時期決定の資料とは言い難い。一方、鉢Ｃは特徴的な器形であり、他地域での窯では今のところ出土していないため、消費地での出土から時期をおさえることができる。これによると前山３号窯出土の鉢Ｃに近似した資料には平城宮ＳＤ650Ｂ[注28]、平安宮内裏ＨＱ73－ＳＫ07[注29]、平安宮内裏蘭林跡[注30]などがある。平城宮ＳＤ650Ｂは天長５(828)年・天長７(830)年の紀年木簡が出土したＳＤ650Ａの上層で、下部は寛平大宝(初鋳870年)の頃、上部は延喜通宝(初鋳907年)の頃と推定されている遺構である。平安宮内裏ＨＱ73－ＳＫ07は内裏内廊の東北部、淑景北舎の東部にあたり平安京Ⅱ期新(900～930年頃)の基準資料である。

小柳４号窯出土の鉢Ｃは、前山３号の鉢Ｃと頸部の形態に微妙な差異があるだけであり、その峻別は困難ではあるが、前述のように頸部の形態から敢えて前山３号と小柳４号窯の遺物を峻別することも可能である。また、椀Ｂも口縁端部の形状、口径・器高、外傾指数から検討することができる。この小柳４号窯に近似した鉢Ｃ・椀Ｂの出土例には前述の平安宮内裏ＨＱ73－ＳＫ07[注31]、内裏土坑２[注32]、平安京左兵衛府跡ＳＤ１[注33]、仁和寺境内ＳＤ34・同ＳＫ47[注33]、北野廃寺ＳＫ15[注35]などがある。平安宮内裏ＨＱ73－ＳＫ07は前述のように平安京Ⅱ期新(900～930年頃)の基準資料、内裏土坑２は同遺構内から多量の壁土が出土しており、天徳４(960年)の内裏焼亡の土層の近似したもので、同地点のＳＫ25[注36]と同時期の平安京Ⅱ期中の基準資料の中に含まれている。平安京左兵衛府跡ＳＤ１は「小野道風(894～966)晩年の時代より下ることのない土師器[注37]」であり、10世紀中頃に推定されている資料である。

黒岩１号窯に近似した鉢Ｃ・椀Ｂには、平安宮西限(１)[注38]、同陰陽寮跡[注39]、右京六条一坊ＳＤ20[注40]、平安京左京二条二坊(高陽院[注41])、同左京八条三坊ＳＤ29Ｂ[注42]、高速鉄道烏丸線立－17ＳＥ１[注43]、北野廃寺ＳＤ14[注44]などがある。平安京左京二条二坊(高陽院)は、藤原頼道の邸第として著名であるが、寛仁３(1015)年の新造以前にも賀陽新王第として利用されており、９世紀前半の州浜の上に盛土された白色粘土から黒岩１号窯に近似した鉢Ｃが出土している。この同一層には土師器の特徴から平安京Ⅱ期新からⅢ期古の土器群と位置づけられている。高速鉄道烏丸線立－17ＳＥ１では延喜通宝１枚、乾元大宝(初鋳952年)４枚が出土しており、平安京Ⅲ期中(960～980年頃)の基準資料であり、黒岩１号窯に近似した鉢とともに後述するように西長尾５・６号窯に近似した鉢Ｃも出土している。

西長尾５・６号窯出土鉢Ｃに近似したものとしては前述の高速鉄道烏丸線立－17ＳＥ１のほか、平安宮内裏内郭回廊の焼土層[注45]、土御門烏丸内裏跡溝２[注46]、平安京右京二条二坊[注47]、同右京三条二坊一町跡１次調査[注48]、同左京四条三坊ＳＥ21[注49]、多賀城跡ＳＥ2132[注50]などがある。高速鉄道烏丸線立－17ＳＥ１は前述のように平安京Ⅲ期中(960～980年頃)の基準資料、平安宮内裏内郭回廊の焼土層から出土した遺物は天徳４(960)年の内裏焼亡時の土器群に近似

している。左京二条二坊九・十・十五・十六町は高陽院跡と推定されている地点で、鉢Cが出土したＳＸ１からは天暦７(953)年と墨書された緑釉陶器も出土している。多賀城跡ＳＥ2132は10世紀前半代の火山灰層の上面に堆積した層の上位にある。

このように消費地での篠産の製品の出土状況から考えると、西長尾３号窯は平安京Ⅱ期古・中、前山３号窯は平安京Ⅱ期中・新、小柳４号窯は平安京Ⅱ期新、黒岩１号窯は平安京Ⅲ期古、西長尾５・６号窯は平安京Ⅲ期中・新の段階が考えられ、『篠窯跡群Ⅰ』や「篠窯跡群出土の須恵器について」(注51)で記した年代観から全体に20～30年前後古くなるものと思われる。

５．おわりに

『篠窯跡群Ⅰ』の刊行以後、平安京を中心とした消費地での調査成果が徐々に増え、他の地域でも篠産の鉢などの出土が知られるようになった。平安京の土器編年ではその間にも進み、古代の土器研究会の方々は筆者の誤った年代観を訂正しながら進められているが、筆者自身の怠慢により『篠窯跡群Ⅰ』以降検討、訂正する機会がなく15年以上が経過した。今回、柳澤さんの指摘を受けて再検討していくと、各窯の年代が前述のように全体に20～30年前後古くなる傾向にあることが明らかとなった。ただ、窯体の補修回数や灰原の堆積状況と、その層序別の遺物の変化までは十分に検討できず、窯がどの程度の期間(数年あるいは10数年単位)に操業されていたのかは明らかではない。なお、前山２・３号窯、黒岩１号窯の実年代の訂正により平安京周辺での緑釉陶器生産窯の変遷にどう変化していくのかは今後検討していきたい。

(いしい・せいじ＝当センター調査第２課調査第４係主任調査員)

注１　石井清司・水谷壽克「古代における生産と流通－篠窯跡群を中心として－」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注２　土器分類については、石井清司「篠窯跡群」(『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995)に準拠している

注３　安藤信策「国道９号バイパス関連遺跡昭和52年度発掘調査概要－黒岩１号窯の発掘調査－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1978)　京都府教育委員会)　1978

注４　水谷壽克・山口　博「篠窯跡群昭和54年度発掘調査概要－篠小柳窯跡群の発掘調査－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980－1)　京都府教育委員会

注５　水谷壽克「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要－小柳４号窯の発掘調査－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981－2)　京都府教育委員会)　1981

注６　注５文献　224頁

注７　安藤信策「国道９号バイパス関連遺跡昭和52年度発掘調査概要－前山１号窯の発掘調査－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1978)　京都府教育委員会　1978

注８　注７文献　246頁

注９　安藤信策「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要－前山２・３号窯－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981－2)　京都府教育委員会)　1981

注10　注９文献　237頁

注11　水谷壽克「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要－西長尾Ｆ地区の発掘調査－」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981－2)　京都府教育委員会　1981

注12　石井清司ほか『篠窯跡群Ⅰ』(『京都府遺跡調査報告書』第２冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注13　注９　245頁

注14　上村憲章「須恵器」(角田文衛編『平安京堤要』平成６年)に準拠し、器高÷｛0.5(口径－底径)｝で、係数が小さくなればなるほど体部が外側に開いていることを意味している。

注15　水谷壽克「篠前山２・３号窯跡再考」(本論集所収)　2000

注16　上村憲章「篠に於ける新様式の影響」(『第63回古代の土器研究会発表資料』1995で、上村氏は「西長尾３号窯、前山２・３号は同型式、小柳４号窯、西長尾５号窯もほぼ同型式と見るのが無理がない」と位置づけている。

注17　水谷壽克・岡崎研一編『篠窯跡群Ⅱ』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989)で、岡崎研一は篠の編年作業「篠窯跡群出土須恵器の編年」をおこなっているが、岡崎氏の編年観とは異なっており、基本的には石井清司編『篠窯跡群Ⅰ』(1984)の編年観と変わっていない。

注18　平尾政幸「緑釉陶器の変質と波及」(『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東　３　施釉陶器－』古代の土器研究会)　1994　85頁

注19　西長尾３号窯出土鉢Ｂに近似した鉢を出土する生産遺跡として滋賀県大津市仰木遺跡がある。木立雅郎『滋賀県大津市仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ(遺構編)』立命館大学文学部　1999

注20　山本雅和「平安京右京二条四坊」(『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1995　(図37－6)

注21　平尾政幸「平安京右京六条一坊」(『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所)　1997　(図31－15)

注22　菅田　薫「平安京右京八条二坊」(『昭和63年度　平安京跡発掘調査概報』(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1989　(図版53－34)

注23　平方幸雄・高橋　潔「平安京右京四条二坊」(『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1991　(図４－21)

注24　川村雅章・吉村・吉本「右京北辺二坊七町」(『平成６年度　京都市内遺跡発掘調査概報』京都市文化観光局)　1995　(図18－33・34)

注25　川村雅章「平安宮職御曹司跡」(『平成６年度　京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化観光局)　1995　(図４－32)

注26　山田邦和編『平安京出土土器の研究』(『古代学研究所研究報告』第4輯　(財)古代學協會)　1994(15図－32)

注27　平尾政幸『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報　昭和61年度』(京都市文化観光局)　1987　(図版3－100)

注28　横田拓実ほか『平城宮発掘調査報告Ⅴ』(奈良国立文化財研究所)　1975　(図版－659)

注29　吉村正親『平成2年度　京都市内遺跡試掘立会調査概報』(京都市文化観光局)　1991　(図17－37)

注30　注26文献　(第22図－22)

注31　注29文献　(図17－38・36)

注32　網　伸也・鈴木久男「平安宮内裏」(『昭和63年度平安京跡発掘調査概報』京都市文化観光局)　1989　(図版7－86)

注33　平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報1978－Ⅱ』(『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978－Ⅱ』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)1978　(図版35－28)

注34　百瀬正恒『仁和寺境内発掘調査報告』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第9冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1990　(図版7－66、86)

注35　堀内明博『北野廃寺跡発掘調査報告書』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第7冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1983　(図版45－836)

注36　丸川義広・鈴木久男「平安京内裏(1)」(『昭和62年度　平安京跡発掘調査概報』　京都市文化観光局)　1998

注37　注33文献に同じ　88頁

注38　辻　裕司「平安宮西限(1)」(『平成2年度　平安京跡発掘調査概報』京都市文化観光局)　1991(図14－28)

注39　本弥八郎「平安宮陰陽寮跡」『平安京跡発掘調査概要1978』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978』　京都市文化観光局　1979(図17－25)

注40　平尾政幸「平安京右京六条一坊」(『平成8年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1998(図63－15)

注41　網　伸也「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」(『研究紀要』第5号　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1998

注42　『平安京左京八条三坊』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1982　(図版15－157・158)

注43　大矢義明ほか『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年度』(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会)　1980　(図版108－74～77)

注44　注35文献　(図版17－465)

注45　山本雅和「平安宮内裏内郭回廊」(『平成6年度　京都市内遺跡発掘調査概報』　京都市文化観光局)　1995　(図7－34)

注46　注26文献に同じ　(第38図－26)

注47　辻　裕司「平安京右京二条二坊」(『昭和56年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1983（８）

注48　馬瀬智光「平安京跡右京三条二坊一町跡」(『平成８年度　京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局）（６）

注49　平尾政幸「平安京左京四条三坊」(『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1984（P22－20・21）

注50　『多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』(宮城県多賀城跡調査研究所）1992（第67図）

注51　石井清司「篠窯跡出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第７号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983